

黄金の3割

2020.12.15

「黄金の3割」という言葉をご存じだろうか。「黄金の3日間」という言葉もある。年度当初の学級経営において非常に重要な言葉である。私は、ここから応用して、国語の授業においては「黄金の3時間」と言っていた。

「黄金の3割」という言葉について紹介したい。「黄金の3割」とは、たとえ少数派であっても、その割合が3割を超すと意思決定に影響を及ぼすことができる数字を表す。それを基に、国は女性管理職登用率の目標を30%に設定している。内閣府女性参画マップ2017によると、女性管理職比率は日本全体で13.5%、福島県は12%、福島市は16.5%であり、目標達成は困難な状況と言わざるを得ない。

新しい内閣ができる度に、女性閣僚が少ないということが話題になる。当たり前である。そもそも国会議員における女性の比率が1割に満たない。女性大臣を増やす前に女性の国会議員を増やさなければならない。

では、福島県の教育界はどうであろうか。以前、県教育センターに勤務していたときに、新任教頭研修会において、学校組織マネジメントの講義を担当することになった。そこで、研修者名簿を見てみた。気づいたことがあった。中学校新任教頭研修会の名簿に女性の名前がないのである。オール「男性」であった。小学校も見てみた。84名中女性はたったの9名だった。率にして10.7%である。国会議員とさほど変わらない。正直「こんなものなのか」と思った。

「これは今年度に限ったことかもしれない」と考え、平成28年度の名簿も調べてみた。中学校が、42名中6名で14.3%、小学校が、89名中9名で10.1%だった。さほどの違いはない。ついでに、平成27年度も調べてみた。中学校が、27名中1名で4%、小学校が、65名中6名で9.2%である。3年間トータルで見ると、中学校が6.5%、小学校が10.1%となる。

国会議員とは違って、半分以上の教員が女性なのである。特に、小学校は女性教員の比率が高いはずである。にもかかわらず、この数字である。学校という職場において、女性の管理職がなかなか増えていかない理由を挙げるのは難しいことではない。「女性管理職を増やそう」とスローガンのように言ったところで増えていくわけではない。具体的な方策が必要である。

学校の先生は、子どもたちの側において、いつも子どもたちに関わっていたいと考えている人が圧倒的に多いだろう。当然のことである。管理職になれば、子どもたちとの距離が遠くなり、直接関わることができなくなるイメージをもっている人も多いのではなかろうか。だが、教頭先生の中には児童生徒の側において、フリーの立場でいつも寄り添ってくれている方もいる。

では、子どもたちの指導に関わる先生方を育て指導するのは、誰なのだろうか。まずは管理職であろう。先生方が力をつければ、それは子どもたちに影響し、子どもたちが力をつけることになる。管理職の大事な仕事に人材育成がある。学校の先生方は、人を育てることに、やりがいを感じているはずである。管理職も人を育てる仕事なのである。

近い将来、教育界の女性管理職が3割に達するようになれば、学校という職場も今以上に変わるかもしれない。その頃には、日本という国もきっと変わっているはずである。